

L'APPAREIL PHOTO

Jean-Philippe Toussaint

ジャン=フィリップ・
トゥーサン

野崎 歓・訳

カ メ ラ



集英社

カ
メ
ラ

普段はこれといって何も起こらない、いたって穏やかな暮らしの流れの中で、たまたまある時、二つの事がほぼ同時にぼくの身近に起こったのだけでも、ただしそれらの出来事は、個々に考えてみるととりわけどうということのないもので、かといって一緒にして考えてみても、残念ながらそのあいだには何のつながりも認められないのだった。それは、ぼくが車の運転を習おうと心に決めたばかりの頃のこと、そう決心しながらもまだなかなか実感が湧かずにいるところに、郵便で、ある知らせが届いたのだ。久しく会ったことのない友だ

ちからの、タイプライターで打った手紙で、そのタイプライターがまたかなりのおんぼろらしいのだけれど、中身は結婚の知らせだった。ところが、もし何か嫌なものがあるかと訊かれたら、ぼくとしては「久しく会ったことのない友だち」と答えたい。

というわけで、ある朝、ぼくは自動車教習所の事務所に出かけていった。広々とした、ずいぶん薄暗い部屋で、奥の方に椅子が何列か並べられていて、その前には映写用スクリーンが掛かっている。壁一面にあらゆる種類の交通標識が掲げられ、そこここに、古い、青く色褪せたポスターが貼ってある。応対してくれた若い女性は、登録に必要な書類のリストをくれてから、授業料の額、そして受講しなければならぬコマ数などを教えてくれた。法規はせいぜい十コマでよく、実技は二十コマというところだけれど、これはうまくいけばの話

だった。それから彼女が引き出しを開けて、申し込み用紙を渡してくれようとしたので、ぼくはちらりとも目をやらずに断って、急ぐことはないんだから、できれば、もうちょっとしてから、例えば必要書類を出しにくる時に申し込むことにした方が、ずっと手間がはぶけるように思いますかと説明した。

その日は家で、新聞を読んだり、手紙を書いたりして過ごした。たまたま、午後遅くにもう一度教習所の事務所の前を通る用事ができた。そこで、ドアを押して中に入ると、さっきの女性はぼくがまた現われたのを見て、さっそく申し込みにきたのだと思い込んだ。そうではないのだけれど、でも事態は進行中で、パスポートのコピーはもう用意したし、戸籍謄本についてはどうすればいいのか、これからちょっと研究してみるつもりだと伝えた。彼女は一瞬目をぱちくりさせてから、ついでに写真もお忘れなくと注意してくれた（ええ、ええ、

写真四枚でしょ、とぼく。

その日の夕方、戸籍謄本が手に入ったので（わざわざコピーまで取っておい
た）、ぼくはもう一度事務所に行ってみた。入口で立ち止まって、ドアの呼び
鈴を眺めた。銅製のチャイムで、小さなノッカーがすり減っている。明るい色
の、ごく薄手の服を着た彼女が、あたしがいるときには鳴らないように切って
おくんですと、にこやかに説明してから、机を回ってこちらにやって来て、チ
ヤイムの遮断器をわざわざ見せてくれた。それが確かにかなりうまいやり方だ
ということとは認めなくてはならない。ぼくらが、ドアを中から開閉したり外に
出て開閉したりしながら、チャイムを切ったりつけたりしてしばらく興じてい
るうちに、外は夜になった。二人がちょうど外に出ているとき、部屋で電話が
鳴った。彼女はすぐに中に入って電話に出、そのあいだぼくは、彼女の正面に

つつ立って、机の上のものを指で動かしたり、何だか知らない帳簿を開いてみ
たりした。受話器をおくとすぐ、彼女がぼくに、書類はどこまで揃ったかと尋
ねたので、二人で一緒に、すでに集まった書類を一つ一つリストアップしてみ
た。申し込みに足りないのは、切手を貼った封筒を除けば、あとは写真だけの
ようだった。帰る前にぼくは、実はついさっき、家で小さい頃の写真を何枚か
見つけたんですよと打ち明けた。よかったら見せてあげましょうと言って、ぼ
くは上着のポケットから封筒を取り出し、机の向こう側にまわりこんで、彼女
の肩越しに指でさして解説を加えながら、一枚一枚披露した。ええとそれは、
ぼくが父の隣に立っていて、その、母の腕に抱かれているのがぼくの妹なんで
す、といった具合。こっちは、プールで、妹も入って二人揃った写真。ええ、
浮き輪の陰になってるのが、まだほんのちびの妹なんです。これも、妹とぼく
のプールの写真。というわけで、とぼくは写真を封筒に戻しながら言った、や

っぱり、これじゃちよつと使えないと思うでしょ（申し込み書類にですよ、とぼく）。

翌朝、教習所が開いたばかりの時間にまた出かけていくと（相変わらず写真が準備できていないなどということは、自分でもよくわかっていた）、受付嬢は、小さなコンロで紅茶のお湯を沸かしているところだった。白いウールの大きめのセーターを引っかけた姿で、何だかすごく眠そうな顔だった。ぼくは映写用スクリーンに向かい合った椅子の一つに腰掛けて、彼女の邪魔にならないようにと、新聞を広げて読み始めた。ありきたりの挨拶を二言、三言交わしながら、ぼくは記事に目を通していただけけれど、紅茶が入って、彼女はあくびをかみ殺しながら、一杯どうかと声をかけてくれた。ぼくは新聞から目を離さずに、結構です、いやはや、と答えた。それから、新聞を畳みながら、コーヒ

ーだったら、嫌とは言わないんですけど、インスタントだって構わないんですよ、と付け足した。彼女がインスタント・コーヒーを買いに出たので（どうせなら、クロワッサンもお願いします）、ぼくは事務所に一人で残され、邪魔が入ると嫌なので、ガラス窓のはまったドアの留め金を押し上げて開かないようにした。また新聞を読んでいると、後ろの方で、ガラスを可愛らしくこつこつと叩く音がした。渋々顔を上げて振り返ってみると、そこにいたのは彼女ではなく、若い男、しかもそれがまたおそろしくぱっとしない奴で、グリーンのコートみたいなものを着て、靴下は白、靴はモカシンという出で立ちだ。新聞を畳んでとうとう立ち上がり、その男のためにドアを開けてやりに行ったのだけれど、さて、どう料理してくれようか。一体何の用でしょう、とぼく。実は十八歳になったんです、と相手は言う（それがどうしたっていうんだ）。今日は休みです、とぼく。でも、ぼく昨日も来たんです、ただ申し込み書類を出した

いだけなんです、と彼。おいおい、頑固なこと言いなさんな、とぼくは、穏やかに目を伏せながら言った。そしてドアを閉めた。それから、相手が遠ざかっていくあいだ、しばらく窓の後ろに立ち、上着のポケットに両手を突っ込んだまま、思案顔で通りを眺めた。小鳥が何羽か、歩道で餌をついばんでいる。若い男は自分のモビレット〔原動機つき自転車〕のところに行つて、ぼろぼろのターンバックルで書類一式を荷台にくくりつけていた。こちらを振り返つて、ちらりと視線を投げると、モビレットにまたがり、通りかかったバスの後ろを、ペダルをこぎこぎ遠ざかっていく——希望なしだよ、諦めな。その少し後、彼女とぼくは、映写用スクリーンの前で朝食を取った。二人の前に椅子を一脚置いて、その上でクロワッサンの袋を縦に裂いてから、よしなしごとを話し合い、もっと近づきになろうと努めた。ぼくの横に脚を組んで坐った彼女は、だぶだぶのセーターの袖をまくり上げて、のんびりと片腕を揉んでいたけれど、うつ

むいたその表情は相変わらず眠たそうだった。ぼくたちはもの静かに、あれこれ話し合い、時々ゆっくり飲み物を飲んだ。それから、彼女が片づけを始め、ぼくも手のくぼみに椅子の上のパン屑を集めた。今日は何をするつもりなのと訊くので、まあ写真の件に取りかかることにしましょうと答えた。机の後ろの席に戻つて、何か書類の整理を始めていた彼女は、あくびしながら、そんなテンポじゃいつになつても書類は揃わないわよと言つた。個人的には、そうとも思えなかった。実際、思うに、彼女はぼくのやり方を誤解しているのだ。彼女はわかっているのだけれど、ぼくのアプローチ法は、一見はつきりしないものではあるが、その狙いは行く手を塞ぐ現実をくたびれさせることにあり、それはちやうど、オリーブの実を相手にするとき、オリーブをまずくたびれさせてしまうと、フォークで刺しやすくなるのと同じで、何であれ決して事を急がないというぼくの性分は、損な性分というところか、実はそれでこそ都合のい

い具合に地盤をならし、機が熟したところで一気呵成に攻撃をしかけることが可能となるのである。

その後、午前中は、何事もなく過ぎていった。十一時頃、ぼくたちは彼女の息子を学校まで迎えにいった。ピエールくんは、あたしと最初の夫とのあいだの子供なの、と彼女は、学校へと向かって大型のボルボを走らせながら説明してくれた。離婚が大分ショックだったみたいなんだけど（ええ、ええ、そりゃそうでしょう）、今では成績はとってもいいのよ、全部Aよ、算数も、体育も。ボルボはかなりスピードを出して走っていて、彼女の隣に坐ったぼくは、ちら

ちらと彼女の方を見ながら、猛烈なスピードで運転しているくせに、表情は相変わらず愛くるしいくらい眠たそうで、小さな目が、運転用のメガネの後ろで今にも閉じられそうな様子であるという、その対照の妙に魅了されてしまった。それに凶画も、凶画もAよ、と彼女はあくびしながら付け加えた。凶画もですか、とぼくも相槌を打つ。勿論だわ、と彼女は、ピエールくんの並外れた能力をぼくが疑ったことに、ほとんど気分を害したような口調で念を押した。ピエールくんは大きくなったら、きっと数カ国語ペラペラになるわよ、少なくとも英語と日本語はね。彼女は日本語という点を力説した。日本語、未来の言葉。あと三十年もすれば、みんなが日本語を話すようになるわ。ね、つまりビジネスの上ではっていうことよ、とあくびしながら付け加える（そんな彼女は可愛らしかった）、ビジネスではね。ピエールくんはビジネスマンになるのよ、文系なんだけど、将来はエコノミストか、それとも外交官になるかもしれないわ。

今のところ彼は、赤いアノラックを着て、毛糸の帽子をかぶった普通の男の子で、そんな姿を、ぼくら二人は学校の柵越しに、優しく見つめた。ぼくらの横歩道の上には、互いに古くからの知り合いらしいお母さんたちが、ちよつと離れたところで、親しげな口調でお喋りしていた。二人で柵の横を進み、ぼくは校門で立ち止まって彼女がグラウンドをずんずん横切っていくのを見守った。関係者でも何でもないのに、グラウンドに入っていくのは気が進まなかった。で、何くわぬ顔で、柵にそってぶらぶら歩きながら待った。彼女の方は体育館の軒下で、ピエールくんの担任の女の先生と話をしている。結局はぼくもそちらの方に歩いていくと、女の先生が、話を続けながら、ぼくに向かってお辞儀をしたので、ぼくも、腕組みをしたまま、お辞儀を返した。先生はぼくたちにピエールくんの勉強ぶりについて話し、とても成績のいい科目もいくつかあるけれど、授業中の態度があまり良くないのですよ、こんなことを申し上げなけ

ればならないのは残念なのですが、と述べてから、直ちに、どうやら父親に説明した方が早いだろうと判断したらしく、ぼくに向かって言葉を続けるので、ぼくはゆっくりと頭を振りながら、さも心配そうな表情で耳を傾けて（ええ、ええ、わかります、わかりますとも）、そんなに言うことをきかない悪戯っ子がいたのでは、授業の邪魔になってしょうがないでしょうと大いに理解を示した。

その翌日から、ぼくはちよつとミラノまで出掛けなければならぬ用事ができた。そこで過ごした二日間は、覚えている限りでは、だらだらと終わりのないような二日間で、英語か仏語の新聞を探して町中を歩き回り、それをいろいろな公園で、太陽の運行に合わせてベンチを移りながら隅々まで読んで、人と会う約束の合い間の空き時間を潰していたのだった。気まぐれな陽光が鼻孔を

心地好くすぐって、ぼくは静かに新聞をめくりながら、ベンチでしきりにくしゃみをした。太陽の光を浴びると、ぼくの鼻は喜んで、たちまち軽いアレルギー症状を起こすらしい。これを別にすれば、特別ミラノですることもなく——新聞を読みながら、時々顔を上げて公園の木蔭の脇道に目をやるのは、確かにミラノならではのことだったが——、後はほとんど一日中歩き回り、新聞を腕に抱えてさまよっていたので、まもなく、足の指のあいだに小さなたこが沢山できて、すっかり弱ってしまった（ぼくの肌は赤ん坊の肌みたいで、とりわけ足の指のあいだが敏感なのだ。これは皆さんへの忠告でもある）。それでぼくはたちまち歩行に支障を来して、体をこわばらせ、嫌々歩いているような感じで、しまいにはつくづく情けなくなり、ちょうど赤信号で長々と待たされたのを機会に、片方の靴と靴下を脱いで症状を確かめてみた。やがて信号が青に変わったが、けんけん跳びながら道を渡るのは気が進まなかったので、片

足でバランスを取りながら靴下をはいた。思わずよろけそうになって、バランスを立て直そうとその場でぴよんぴよん跳ねていたとき、ふと気づくと、目の前に、ミラノでぼくを接待してくれている人達の一人であるシニョーレ・ガンビーニが現われたのだが、この人こそ、前々夜、ぼくを空港まで迎えにきて、それから車でホテルまで連れて行ってくれた人なのだ。なかなか感じのいい人物で、到着の晩、ぼくを部屋に落ち着かせてくれた後、一緒にホテルのインターナショナル・バーでウイスキーでもいかがでしょうと誘ってくれ、そこでさまざまな資料や、小型版の市街地図を一冊くれたのだけれど、その地図には、町のいろいろな博物館を見にいきやすいようにと彼自身の手で丁寧に書き込みまでしてあった。その彼が、ぼくが靴下をはこうと苦労している今また、親切きわまりない態度で、何かお役に立てることがあれば何なりとおっしゃってくださいと言ってくれるのだ（そう、足のお医者をお願いします、とぼくは彼の腕に

すがりながら叫んだ。

シニョーレ・ガンビーニに連れられて行った（タクシーで行った）足治療医の診察室は、実にエレガントな造りで、患者にはそれぞれ個室が用意されていた。その個室には、いろいろな雑誌を載せた低いテーブルの周りにソファを配した、待合室代わりの豪華なサロンから入っていくのである。シニョーレ・ガンビーニはここでは顔がきくらしく、彼のおかげですぐに予約が取れた。彼が二人分のカンパリを注文し、ぼくは待合室の中をぶらついて、部屋の飾りになっている、何だかぞっとしない海洋画を眺めていた。間もなく若い女性が呼びに来て、小さな個室に案内し、靴を脱ぐよう指示した。トウツテ・ドゥーエ〔両方ともですか〕とぼくは靴を指さして尋ねた。そうですか。靴とロング・ソックスを脱いで、壁際にきちんと並べてから、スツールに坐った女性に向か

い合って腰を下ろし、片足のかかとを、ふんわりと柔らかかなパイル地のタオルを載せた彼女のものあいだに、心地よく委ねた。そろそろと足をつかまれて、くすぐったく感じたのも束の間、彼女は容赦なく足をひっくり返すと、まず足の裏、それから爪、さらには指を一本一本、自分の指先で左右に開きながら調べていったが、とある箇所まで来て身を乗り出し、感嘆のあまり口笛みたいな音さえ洩らしながら、じつくりと観察した。薬箱を引き寄せて、その中から恐ろしげな小型器具をひっぱり出した彼女に、指のあいだを丹念に治療してもらいながら、ぼくは、サロンのソファの一つにくつろいで坐ったシニョーレ・ガンビーニが、膝の上に乗せたアタッシェケースを開けて、あれこれ資料を取り出し、時々カンパリを啜りながら目を走らせているのを眺めていた。少したつて、治療が長引いていると見るや、彼はポケットに片手を突っ込んで様子をつかがいに来て、彼女の手元をのぞき込み、ぼくの足に並々ならぬ関心を寄せて

いることを態度で示し、さらには世話役としての配慮から、皮膚硬化の症状について彼女と二、三、言葉を交わしさえした。た、こですよ、心配ない、ただのた、こですと通訳すると、サロンに戻って、ぼくにカンパリを持ってきてくれた。それを一口飲んでいゝるあいだに、彼女は足の指に包帯を巻き終わった。それから彼女が薬箱を棚に戻し、ぼくが靴をはいていると、シニョーレ・ガンビーニは、一つだけちよつと診てもらっておきたいことがあるんですと言いながら、個室の中で靴を脱ぎ、靴下も脱ぐと、彼女に足の横側を見せて、親指の爪に注意を促したのだけれども、確かに爪はずいぶんと縮まっていた、肉に食い込みかねない様子だった。彼らはこの件に関してイタリア語で長々と話し込み、正直に言ってぼくが加わるにはあまりに専門的すぎる会話だったが、それでもぼくも、お知恵拝借とばかりにわれわれの目の前に晒されている毛深い足をじつと見つめ、気づかわしげに、時々かぶりを振ったりしながら話についていった。

急いで付け加えておくと、シニョーレ・ガンビーニの足はまったく心配なしで、そう言われて彼もようやく靴下をはき、われわれは空のグラスを持って個室を出た。

外に出て、シニョーレ・ガンビーニが昼食でもどうですと提案した小さなレストランに向かう道々、ぼくは下を向いて、靴の中で足の指を動かしてみても楽しんだ。包帯のせいでちよつとくすぐったいのが、少しも嫌な感じではなく、ぼくはシニョーレ・ガンビーニに対する感謝の念に胸を熱くして彼の顔を見た（鼻毛が伸びているのに気がついてしまった）。レストランに着くと、しきりに先生^{ドットレ}、先生を連発する給仕に迎えられ、奥の方の、よしずで外から見えないようになった中庭に案内された。格子の屋根が張り出していて、その上には野生のつたが生い茂っている。風で葉が優しく揺れると、日の光がちらちらとテ